研究ノート

エジプト、ダハシュール北遺跡の青色彩文土器について

高橋　寿光*

The Blue-Painted Pottery Vessels from Dahshur North

Kazumitsu Takahashi*

Abstract

The blue-painted pottery is one of the most characteristic ceramic types in New Kingdom Egypt, dating from the mid-Eighteenth Dynasty with the reign of Amenhotep II to the early Twentieth Dynasty during the reign of Ramesses IV. The pottery is painted predominantly in blue, supplementary in red and black, with floral and faunal motifs. The previous studies showed that the find spots of blue painted pottery were essentially restricted to main administrative centers or royal residential centers, such as Qantir, Memphis, Gurob, Amarna and Thebes, and these provenances suggest that they were manufactured particularly in “royal workshops”.

The blue-painted pottery vessels dating to the Amarna period, post-Amarna period and Nineteenth Dynasty had been found from New Kingdom cemetery at Dahshur North. They were uncovered from tomb of Ipay, originally dating to Amarna and post-Amarna period, and then reused by Mes in the reign of Ramesses II, and its surrounding shaft tombs which are also dated to these periods. The author recognized some differences in fabrics, forms and designs of vessels between Dahshur North and surrounding sites, such as Northwest Saqqara, Memphis and Saqqara. This paper aims to summarize the blue-painted pottery vessels from Dahshur North, and to discuss production system of blue-painted pottery within Memphite area.

There are some similarities in fabrics, forms and designs of blue-painted pottery among Northwest Saqqara, Memphis, Saqqara and Dahshur North during Amarna period. Such similarities imply that they had been manufactured at same workshop in the Memphite area. However, in the Nineteenth Dynasty, some marked differences can be seen among these sites. They seem to indicate that they were manufactured in different workshops. In sum, in the Nineteenth Dynasty, blue-painted pottery vessels were manufactured not only in royal workshops, but also even in local workshops where they supplied pottery vessels to local cemeteries, such as Dahshur North.

1. はじめに

ダハシュール北遺跡は、エジプト、カイロ近郊のダハシュールの赤いピラミッドから北北西に約 2km の砂漠の中に位置する中王国時代から新王国時代の墓地遺跡である。これまでの東日本国際大学／早稲田大学の発掘調査によって新王国時代のイパイ墓およびその周辺から青色彩文土器が発見されている [1)]。筆者は、2018 年から 2020 年に、これらの青色彩文土器の調査を実施した。本稿では、当該遺跡から出土した青色彩文土器について、その概要を報告するとともに、青色彩文土器研究の一環として、年代および生産に関する考察を行ってみたい [2)]。

＊ 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授

＊ *Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*

2. ダハシュール北遺跡の青色彩文土器の概要

以下に、調査を行なった青色彩文土器について概要を示す（図 1–3）[3)]。記述に際しては、器形名称、図版番号に続けて、遺物番号、出土場所、寸法、胎土、下地のスリップの有無、そして備考、類例の順で記すこととする。

（1）漏斗状頸部壺形土器（図 1.1）

DN06-o0245、イパイ墓の第 2 中庭から出土、最大径 18.9cm、高さ（残存部）17.1cm、Nile B2 胎土、白色スリップの下地。

胴部には、黒で書かれたマークが見られる [4)]。底部付近には、焼成後に意図的に開けられた孔が見られる [5)]。また、内面には内容物が見られ、外面には赤色のモルタルが付着している。類例は、テル・アビアド（Minault-Gout et al. 2012: fig.3.8, 9, pl.2A）、アブ・シール（Mynářová 2006: figs.3, 4）、アブ・シール南丘陵遺跡（早稲田大学エジプト学研究所（編）2007: 図 77, pl.7.3–5; Takahashi 2014: fig.8）、サッカラ・テティ王墓地（Kanawati et al. 1984: pl.45.S83:65）、サッカラ・ホルエムヘブ墓（Bourriau et al. 2005: fig.25.134; Aston, B. 2011: figs. VI.20.176, VI.27.219–221）、メンフィス（Bourriau et al. 2000b: fig.2.9）、アマルナ（Rose 2007: nos.422, 425）、カルナク北（Hope 1999: fig.1.b, c）。

（2）漏斗状頸部壺形土器（図 1.2）

DN06-o0287, o0873, o0977, o1080, o1212、第 27 号墓内部の部屋から出土、最大径（残存部）17.7cm、高さ（残存部）16.9cm。Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、上記の漏斗状頸部壺形土器（図 1.1）と同じ。

（3）漏斗状頸部壺形土器（図 1.3）

DN06-o0285、第 27 号墓内部の部屋から出土、口径 34.3cm、高さ（残存部）11cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

焼成後に意図的に開けられた孔（？）。類例は、アマルナ（Rose 2007: nos.442, 443）。

（4）漏斗状頸部壺形土器（図 1.4）

DN06-o930, o0955, o1215、第 27 号墓内部の部屋から出土、最大径（残存部）24cm、高さ（残存部）17.5cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、アマルナ（Rose 2007: nos.442, 443）。

（5）卵状壺形土器（図 1.5）

DN05-o0198, o0252, o0419, o0424, o0434, o0436, o0473, o0501, o0520, o0577, o0595、第 24 号墓シャフト部および内部の部屋から出土、口径 13cm、最大径 15.7cm、高さ 27.6cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

ほぼ完形で、胴部に、焼成後に意図的に開けられた孔が見られる。類例は、サッカラ・ホルエムヘブ墓（Bourriau et al. 2005: fig.23.126）、サッカラ・マヤとメリト墓（Aston, D. 2011: no.54）、グラーブ（UC19122[6)]、UC24541[7)]）。

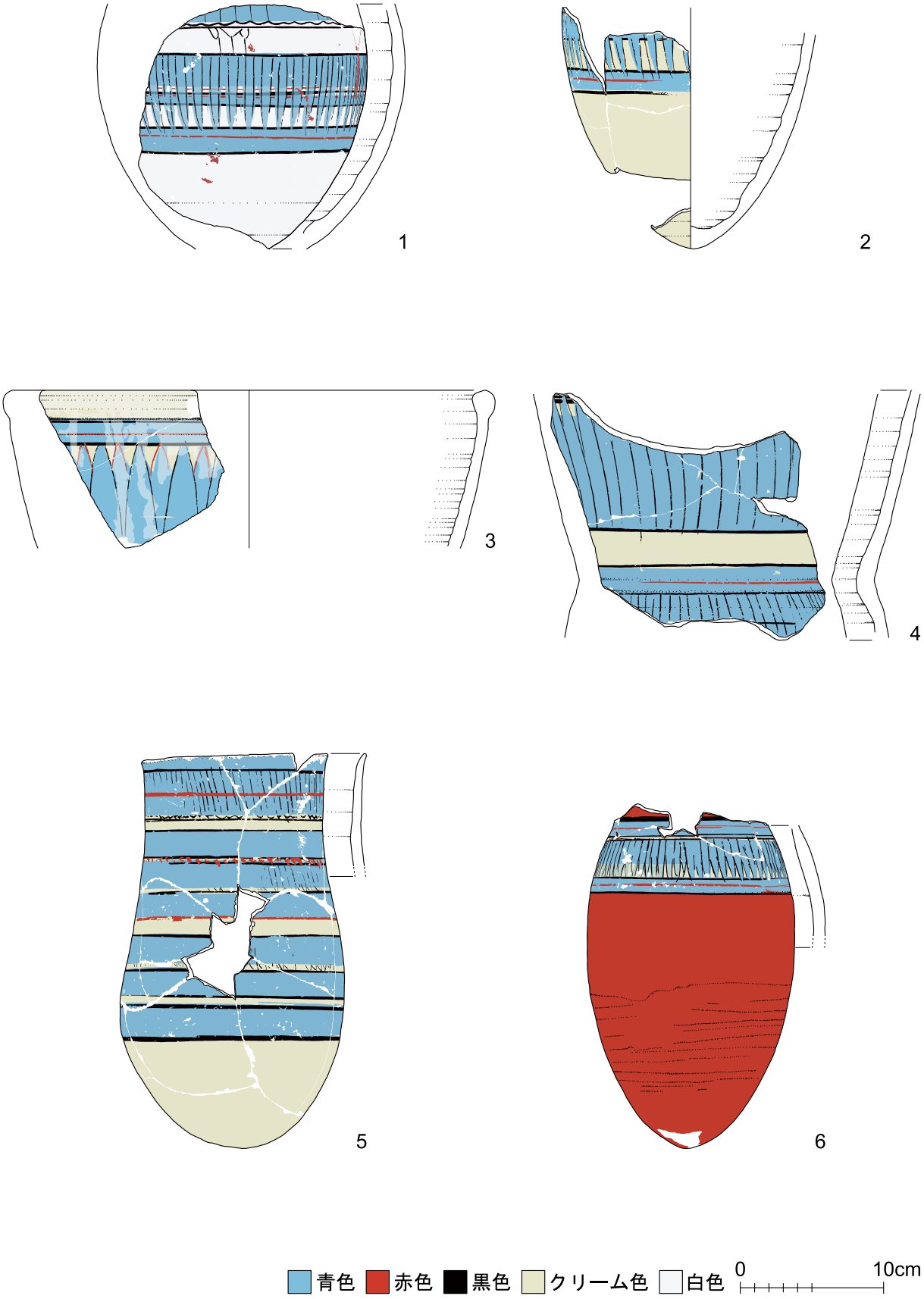

図 1　ダハシュール北遺跡の青色彩文土器（1）
Fig.1 Blue-painted pottery vessels from Dahshur North (1)

（6）漏斗状頸部壺形土器（図 1.6）

DN6-o0270, o0502、第 27 号墓シャフト部および内部の部屋から出土、最大径 14.5cm、高さ（残存部）24.1cm、Nile B2 胎土、全体的に赤色スリップの下地で、胴部上のみクリーム色スリップの下地。

頸部に、焼成後に意図的に開けられた孔（？）。類例は、サッカラ・マヤとメリト墓（Aston, D. 2011: no.59）。

（7）漏斗状頸部壺形土器（図 2.1）

DN05-o0198、第 24 号墓シャフト部から出土、口径 13.8cm、最大径 18.9cm、高さ（残存部）27.9cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、サッカラ・マヤとメリト墓（Aston, D. 2011: no.61）。

（8）球状壺形土器（図 2.2）

DN06-o0945, o0957, o0993, o1000, o1210, o1215、第 27 号墓内部の部屋から出土、最大径 23cm、高さ（残存部）21.6cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、サッカラ・ホルエムヘブ墓（Aston, B. 2011: fig.VI.8.75）、サッカラ・イニウイア墓（Aston, B. 2012: fig.VII.9.20）。

（9）壺形土器（図 2.3）

DN02-o0260、イパイ墓の北側（3E-020 グリッド）から出土、最大径（残存部）36.5cm、高さ（残存部）13.6cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、サッカラ・マヤとメリト墓（Aston, D. 2011: no.82）。

（10）漏斗状頸部壺形土器（図 2.4）

DN02-o0089, o0090、イパイ墓の南側室から出土、口径 20.5cm、最大径 21.8cm、高さ（残存部）18cm、Nile B2 胎土、白色スリップの下地。

おそらく図 2.4–6 は同一個体と考えられる。

（11）漏斗状頸部壺形土器（図 2.5）

DN02-o0089, o0090、イパイ墓の南側室から出土、口径 21.8cm、最大径 22.4cm、高さ（残存部）11cm、Nile B2 胎土、白色スリップの下地。

おそらく図 2.4–6 は同一個体。

（12）漏斗状頸部壺形土器（図 2.6）

DN02-o0089, o0090、イパイ墓の南側室から出土、最大径 31.7cm、高さ（残存部）21.3cm、Nile B2 胎土、白色スリップの下地。

おそらく図 2.4–6 は同一個体。類似した胴部の花の装飾は、サッカラ・ホルエムヘブ墓（Bourriau et al. 2005: fig.28.147）。

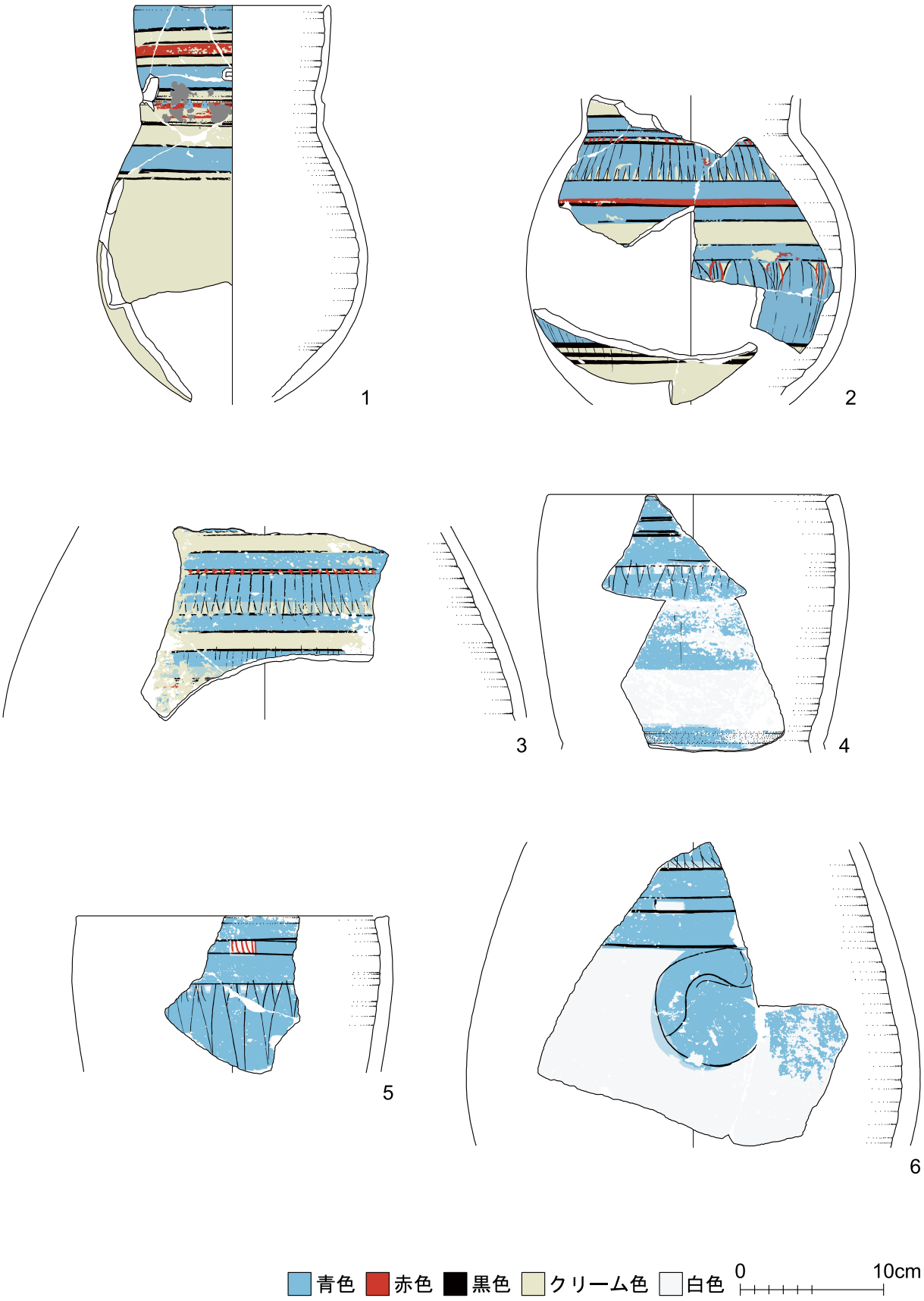

図 2　ダハシュール北遺跡の青色彩文土器（2）
Fig.2 Blue-painted pottery vessels from Dahshur North (2)

（13）卵状壺形土器（図 3.1）

DN03-o1363、イパイ墓の北側（4E-013 グリッド）から出土、口径 10.1cm、最大径（残存部）10.7cm、高さ（残存部）11.6cm、Nile D 胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、サッカラ・イニウイア墓（Aston, B. 2012: fig.VII.30.208, 212）。

（14）漏斗状頸部壺形土器（図 3.2）

DN02-o0667、イパイ墓の北側（3E-020 グリッド）において、骨、木片、ビーズなどの集中とともに出土、最大径（残存部）13.1cm、高さ（残存部）13.2cm、Nile D 胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、サッカラ・テティ王墓地（Sowada et al. 1999: pl.50.TNE94:1, TNE95:179）、サッカラ・イニウイア墓（Aston, B. 2012: figs.VII.34.242, VII.36.265, 266）。

（15）卵状壺形土器（図 3.3）

DN03-o1210、イパイ墓の北側（4E-012 グリッド）から出土、最大径（残存部）16.5cm、高さ（残存部）15.2cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

胴部に、焼成後に意図的に開けられた孔（？）。類例は、サッカラ・ホルエムヘブ墓（Bourriau et al. 2005: fig.23.125）、サッカラ・ティアとティア墓（Aston, D. 1997: pl.119.150, 151）。

（16）漏斗状頸部壺形土器（図 3.4）

DN03-o0469、イパイ墓の北側（4E-012 グリッド）から出土、最大径（残存部）16.4cm、高さ（残存部）15.8cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

胴部に、焼成後に意図的に開けられた孔（？）。類例は、サッカラ・テティ王墓地（Sowada et al. 1999: pl.50.TNE94:1, TNE95:179）、サッカラ・イニウイア墓（Aston, B. 2012: figs.VII.34.242, VII.36.265, 266）。

（17）漏斗状頸部壺形土器（図 3.5）

DN06-o0118、イパイ墓西側（3E-008 グリッド）の子供の単純埋葬内部から出土[8)]、口径 11.8cm、最大径 12.6cm、高さ 20.1cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

完形。類例は、サッカラ・テティ王墓地（Sowada et al. 1999: pl.50.TNE94:1, TNE95:179）、サッカラ・イニウイア墓（Aston, B. 2012: figs.VII.34.242, VII.36.265, 266）。

（18）壺形土器（図 3.6）

DN02-o3022、イパイ墓の東側（4D-094 グリッド）から出土、最大径 18.8cm、高さ（残存部）17.6cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

（19）漏斗状頸部壺形土器（図 3.7）

DN06-o0019、イパイ墓の第 2 中庭から出土、最大径（残存部）28.9cm、高さ（残存部）21.3cm、Nile B2 胎土、クリーム色スリップの下地。

類例は、サッカラ・テティ王墓地（Sowada et al. 1999: pl.50.TNE95:126）。

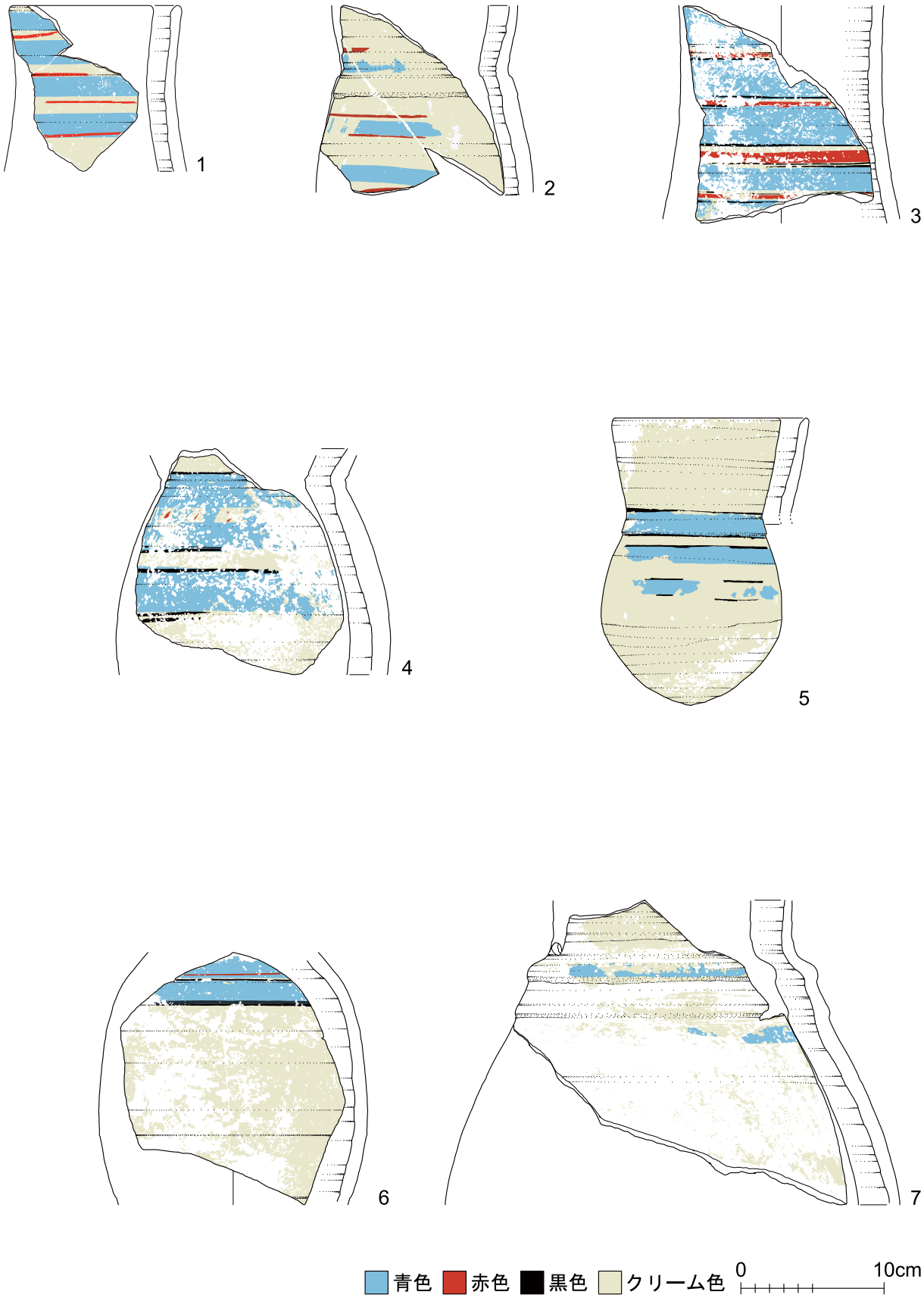

図 3　ダハシュール北遺跡の青色彩文土器（3）
Fig.3 Blue-painted pottery vessels from Dahshur North (3)

3. 青色彩文土器の年代について

今回調査の対象とした青色彩文土器は、イパイ墓周辺やイパイ墓西側のシャフト第 24 号墓、第 27 号墓より出土している。今のところ、1 例（図 3.5）を除いて、元の位置を保っているものはないと考えられる。ただし、大きく移動しているとは考えにくく、付近における活動と関連していると考えられる。イパイ墓およびその周辺のシャフト墓では、これまでに第 18 王朝後期アマルナ時代に特徴的な建材や、第 18 王朝末ポスト・アマルナ時代、第 19 王朝中期ラメセス 2 世時代の王名を持つ遺物が発見されており（吉村他 2004）、青色彩文土器もこれらの時代に年代づけられる可能性がまず考えられる。

ここで青色彩文土器自体の類例を見てみると、それぞれ、図 1.1–4 の青色彩文土器は第 18 王朝後期アマルナ時代、図 1.5, 6、図 2.1–6 は第 18 王朝末ポスト・アマルナ時代、図 3.1–7 は第 19 王朝中期ラメセス 2 世時代に類例が見られる。周辺から出土している遺物の年代とも大きくかけ離れてないことから、これらの時代に年代づけて問題はないと考えられる。

4. 青色彩文土器の生産について

当該遺跡の青色彩文土器は、第 18 王朝後期アマルナ時代までは、胎土、器形、装飾において、近隣のアブ・シール南丘陵遺跡、サッカラ、メンフィスなどとの類似が見られる（図 4）。また、ダハシュール北遺跡（図 4.1）とサッカラのテティ王墓地から出土した例（Kanawati et al. 1984: pl.45.S83:65）や、アブ・シール南丘陵遺跡（図 4.2）とメンフィス（図 4.5）の例には、それぞれ類似したマークも書かれている。こうしたことから、これらの青色彩文土器は、同一もしくは同じグループの工房で製作されたと考えられる [9)]。

第 18 王朝末期のポスト・アマルナ時代では、近隣のサッカラなどの青色彩文土器と比較すると、胎土は同じ Nile B2 胎土であるものの、器形や装飾に若干の相違が見られるようになる。図 5 に挙げた卵状壺形土器の例では、大きさや装飾の細部が異なっている（図 5）。ただし、差異は大きいものではないため、単なる個人差や僅かな時期差の可能性も考えられる。今のところ、異なる工房で製作されていた可能性を挙げるに留めてみたい。

第 19 王朝中期ラメセス 2 世時代では、違いがより目立つ青色彩文土器が見られるようになる。例えば、図 6.1 と図 6.2 に挙げた卵状壺形土器の例では、装飾、器形は類似しているものの、ダハシュール北遺跡では Nile D 胎土で製作されており（図 6.1）、一方、サッカラ・イニウイア墓では Nile B2 胎土で製作されている（図 6.2）。また、ダハシュール北遺跡（図 6.3–5）とアブ・シール南丘陵遺跡（図 6.6–8）の例を比較すると、アブ・シール南丘陵遺跡の方がより多く青を用いるといったような装飾の違いが見られる。こうしたことから、現在のところ、第 19 王朝では、地域の工房で青色彩文土器がそれぞれ別々に製作されたと解釈してみたい [10)]。

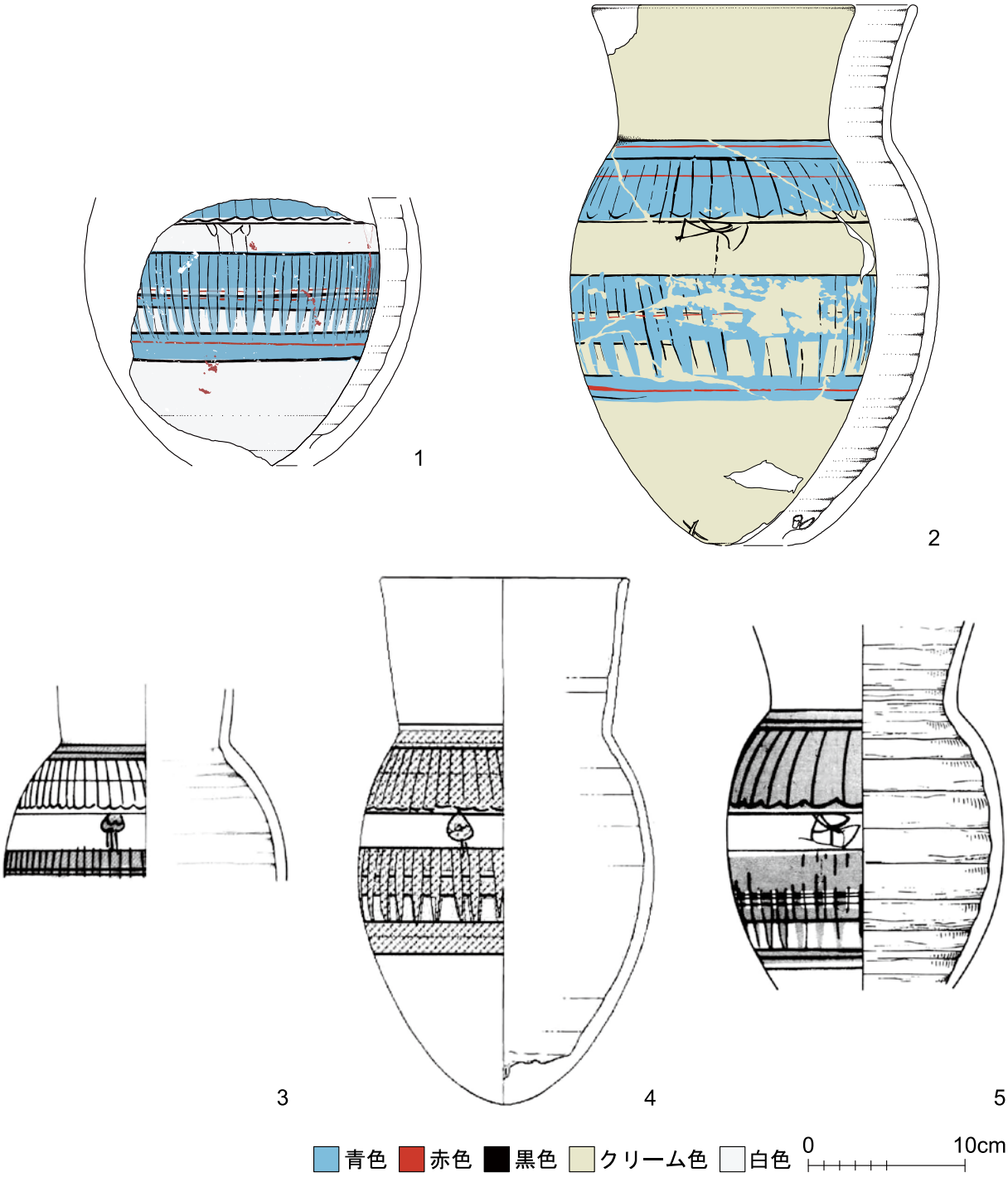

図 4　第 18 王朝後期アマルナ時代のダハシュール北遺跡および周辺の遺跡の青色彩文土器
1: ダハシュール北遺跡（本稿図 1.1）、2: アブ・シール南丘陵遺跡（Takahashi 2014: fig.7.1）、
4, 5: サッカラ・ホルエムヘブ墓（Bourriau et al. 2005: fig.25.134; Aston, B. 2011: fig.VI.27.219）、
6: メンフィス（Bourriau et al. 2000b: fig.2.9; Hope 2016: 72, no.6119）
Fig.4 Blue-painted pottery vessels dating to the Amarna period from Dahshur North and surrounding sites

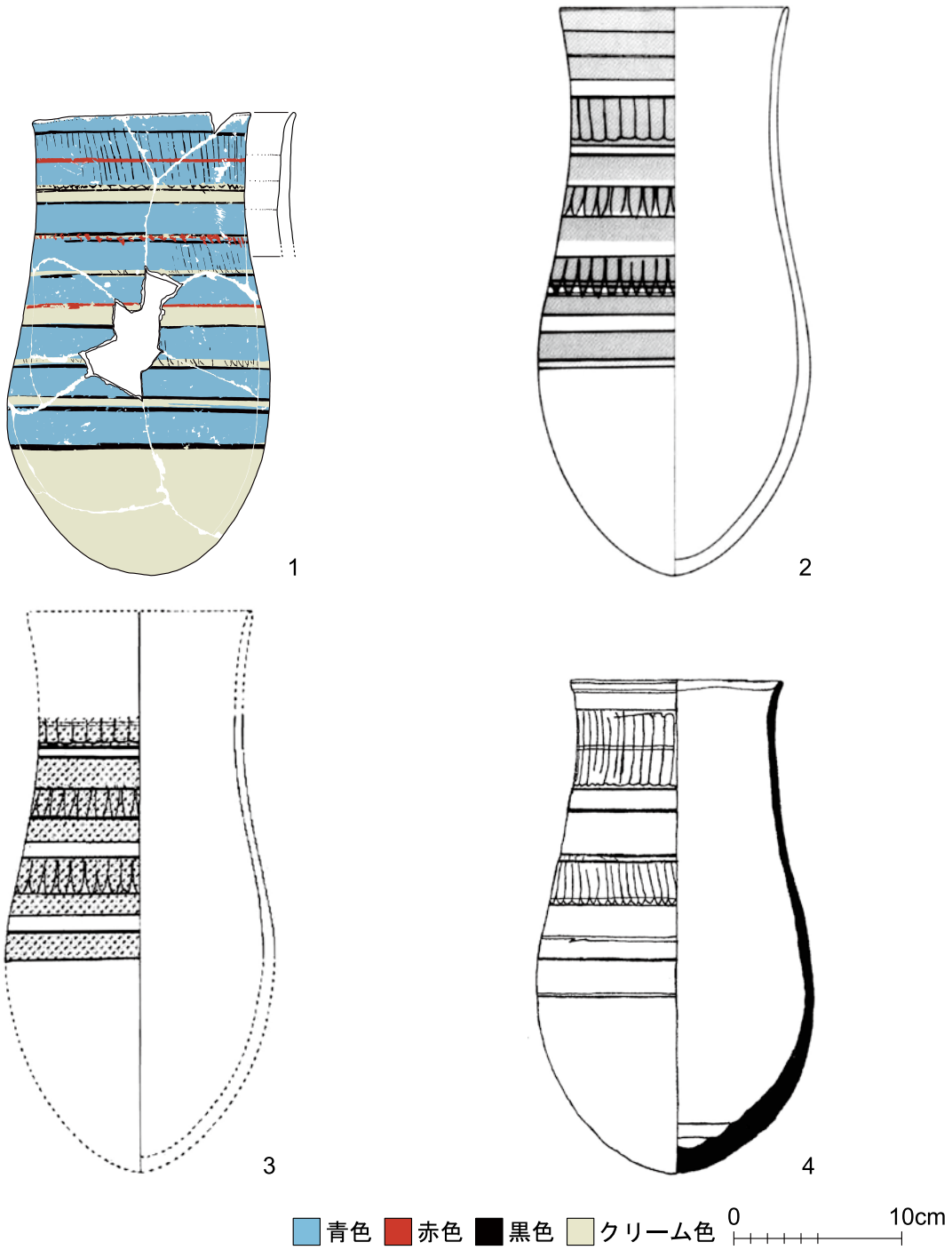

図 5　第 18 王朝末ポスト・アマルナ時代のダハシュール北遺跡および周辺の遺跡の青色彩文土器
1: ダハシュール北遺跡（本稿図 1.5）、2: サッカラ・ホルエムヘブ墓（Bourriau et al. 2005: fig.23.126）、
3: サッカラ・マヤとメリト墓（Aston, D. 2011: no.54）、4: グラーブ（Thomas 1981: pl.9.187）
Fig.5 Blue-painted pottery vessels dating to the post-Amarna period from Dahshur North and surrounding sites

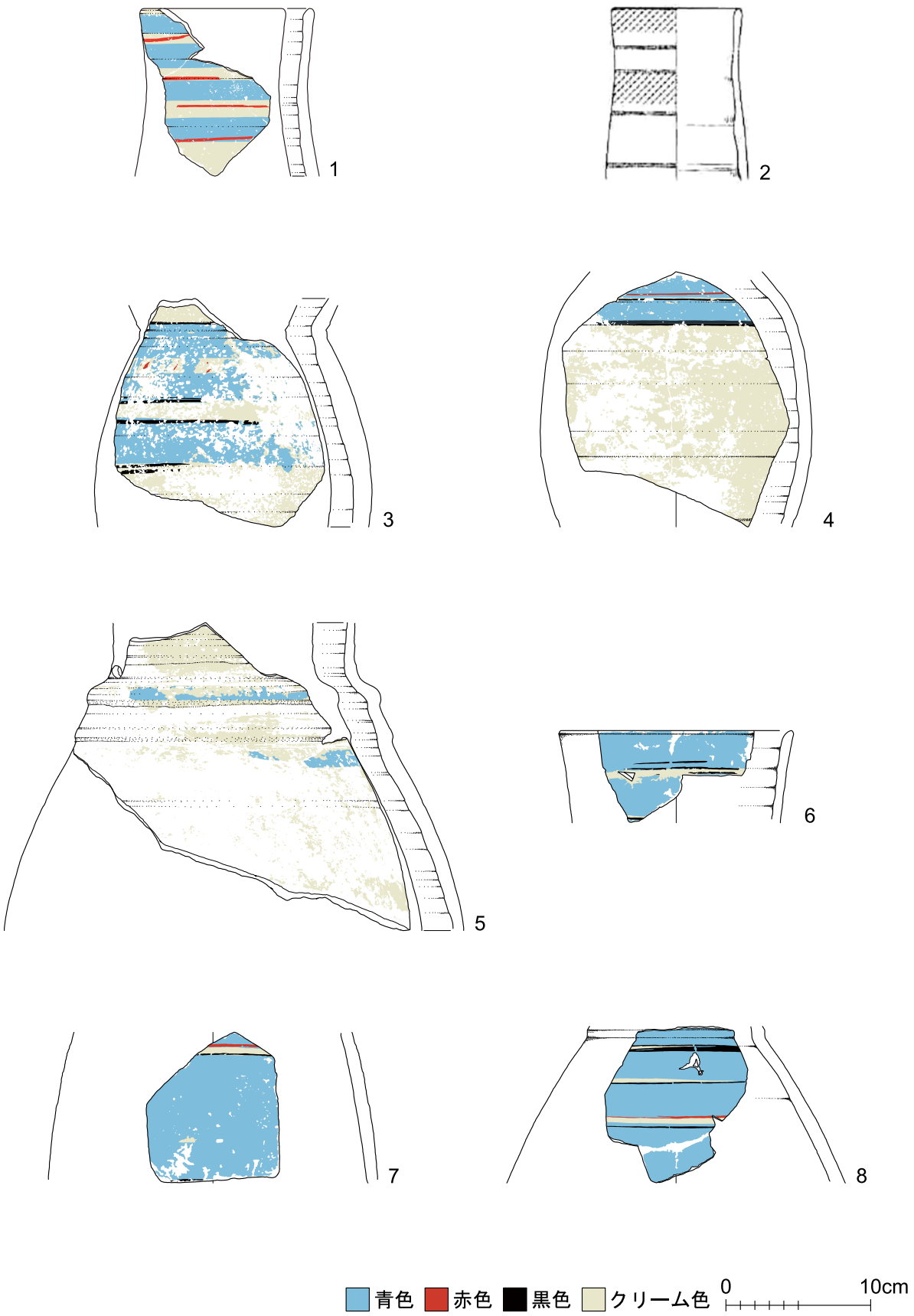

図 6　第 19 王朝中期ラメセス 2 世時代のダハシュール北遺跡および周辺の遺跡の青色彩文土器
1: ダハシュール北遺跡（本稿図 3.1）、2: サッカラ・イニウイア墓（Aston, B. 2012: fig.VII.30.208）、
3–5: ダハシュール北遺跡（本稿図 3.4, 6, 7）、6–8: アブ・シール南丘陵遺跡（Takahashi 2014: fig.8.2, 4, 5）
Fig.6 Blue-painted pottery vessels dating to the reign of Ramesses II from Dahshur North and surrounding sites

5. おわりに

本稿では、筆者が調査を行なったダハシュール北遺跡の青色彩文土器について、報告を行うとともに、年代と生産に関する考察を行なった。年代については、第 18 王朝後期アマルナ時代、第 18 王朝末ポスト・アマルナ時代、第 19 王朝中期ラメセス 2 世時代に年代づけられることを述べた。また、周辺のアブ・シール南丘陵遺跡やサッカラ出土の青色彩文土器との比較を行い、アマルナ時代以降、特に第 19 王朝では、胎土、器形、装飾に違いが見られるようになることから、それぞれの地域で青色彩文土器を生産していたと結論づけた。筆者は、すでにエジプト全土の青色彩文土器の比較から、第 19 王朝では、カンティール、サッカラ、アビュドス、ルクソール、エレファンティネなどにおいて、地域ごとに青色彩文土器が製作されるようになった点を指摘したが（高橋 2019b）、今回の考察によって、アブ・シール南丘陵遺跡、サッカラ、ダハシュール北遺跡などのような比較的距離の近い場所においても、それぞれの場所で青色彩文土器が生産されていた点を指摘することができた。

註

1) これまでのダハシュール北遺跡におけるイパイ墓および周辺の発掘調査の概要については、以下を参照（吉村他 1988, 1999, 2000, 2001, 2002, 2004）。
2) 本稿を著するにあたり、吉村作治・東日本国際大学学長、近藤二郎・早稲田大学教授、馬場匡浩・早稲田大学研究員、矢澤健・東日本国際大学客員教授より資料発表の許可をいただきました。調査研究は日本学術振興会科学研究費・若手研究（B）「古代エジプト、青色彩文土器の生産と流通に関する考古学的研究」（研究代表者：高橋寿光・東日本国際大学）の助成を受けて行われました。ここに記して感謝いたします。
3) 土器の胎土に関しては 10 倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システムを参照し、記述を行った（Nordström and Bourriau 1993; Bourriau et al. 2000a: 130–132）。土器の器形に関しては、最大径と高さの関係などの数値に基づいた器形分類を参考に、エジプトの土器研究で一般的に用いられている英語名称を日本語に訳し、不自然な日本語であることは承知しつつ、便宜的に名称を付した（Aston, D. 1998: 41–51）。
4) このようなマークに関しては、C. ホープ（Hope）が絵師、工房、内容物、特別な供物を示したもの、などの様々な可能性を挙げている（Hope 1999: 122–133）。また、P. ローズ（Rose）は青色彩文土器を装飾した絵師を示した可能性を指摘している（Rose 2007: 24–25）。類似したマークは、サッカラ・テティ王墓地の例に見られ、この例では 2 つのアンクの間にロータスが書かれている（Kanawati et al. 1984: pl.45.S83:65）。ダハシュール北遺跡の例では、アンクとロータスがやや省略して書かれていると考えられる。2 つのアンクの間にロータスが書かれた例は、他にもカルナク北に見られる（Hope 1999: fig.3.o1, o2）。
5) 青色彩文土器に開けられた孔については、儀式に際して開けられたと考えられる（高橋 2013, 2019a; Takahashi 2019）。
6) Petrie 1890: pl.XXI.41; Thomas 1981: pl.9.187
7) Petrie 1890: pl.XXI.50; Brunton and Engelbach 1927: pl.XXXIV.22N
8) 北東 - 南西軸の掘り込み（長軸約 130cm、短軸約 30cm）の南西端に据えられるようにして出土している。北東側には頭蓋骨片、南西側には足の骨片が出土しており、またビーズも発見されている。出土遺物や掘り込みの大きさなどから、子供の単純埋葬であったと考えられる。埋葬自体はすでに盗掘されているものの、出土状況から土器は元の位置を保っていると考えられる。なお、類似した子供の単純埋葬に伴う青色彩文土器は、サッカラ・ホルエムヘブ墓の南側からも発見されている（Aston, B. 2011: 250, 252, fig.VI.29.233）。
9) なお、アマルナでも類似した器形と装飾の青色彩文土器が出土しているが、J.D. ボリオウ（Bourriau）らによる胎土分析の結果、メンフィスとは異なる胎土が用いられていたことが明らかとなっている（Bourriau et al. 2000b: 12）。
10) J. ブドカ（Budka）も、アビュドスの第 19 王朝の青色彩文土器について、在地で製作された可能性を提示している。ただし、ブドカは更なる検討が必要で、また一部ルクソールなどから搬入された青色彩文土器があるのではないか、とも述べている（Budka 2006: 113）。また、シリア・パレスティナ地域、イスラエル北部のハツォル遺跡では、胎土分析から、在地の胎土で青色彩文土器が製作されたことが確認されている（Nataf 2014: 26–27, fig.3）。

参考文献

Aston, B.G.

2011 “The Pottery”, in Raven, M.J., Verschoor, V., Vugts, M. and van Walsem, R., *The Memphite Tomb of Horemheb, Commander in Chief of Tutankhamun V: The Forecourt and the Area South of the Tomb with Some Notes on the Tomb of Tia*, Turnhout, pp.190–303.

2012 “The Pottery”, in Schneider, H.D., *The Tomb of Iniuia in the New Kingdom Necropolis of Memphis at Saqqara*, Turnhout, pp.139–217.

Aston, D.A.

1997 “The Pottery”, in Martin, G.T., *The Tomb of Tia and Tia: A Royal Monument of the Ramesside Period in the Memphite Necropolis*, London, pp.83–102.

1998 *Die Keramik des Grabungsplatzes Q I, Teil 1: Corpus of Fabrics, Wares and Shapes*, Mainz am Rhein.

2011 “Blue Painted Pottery of the Late Eighteenth Dynasty: The Material from the Tomb of Maya and Meryt at Saqqara”, *Cahiers de la Céramique Égyptienne* 9, pp.1–35.

Bourriau, J., Nicholson, P.T and Rose, P.

2000a “Pottery”, in Nicholson, P.T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.121–147.

Bourriau, J.D., Smith, L.M.V. and Nicholson, P.T.

2000b *New Kingdom Pottery Fabrics: Nile Clay and Mixed Nile-Marl Clay Fabrics from Memphis and Amarna*, London.

Bourriau, J., Aston, D., Raven, M.J. and van Walsem, R.

2005 *The Memphite Tomb of Horemheb, Commander-in-Chief of Tut'ankhamun III: The New Kingdom Pottery*, London.

Brunton, G. and Engelbach, R.

1927 *Gurob*, London.

Budka, J.

2006 “The Oriental Institute Ahmose and Tetisheri Project at Abydos 2002-2004: The New Kingdom Pottery”, *Ägypten und Levante* 16, pp.83–120.

Hope, C.A.

1999 “Some remarks on potmarks of the late Eighteenth Dynasty”, in Leahy, A. and Tait, J. (eds.), *Studies on Ancient Egypt in Honour of H.S. Smith*, London, pp.121–146.

2016 *The Survey of Memphis X: Kom Rabia: The Blue-Painted Pottery*, London.

Kanawati, N., El-Khouli, A., McFarlane, A. and Maksoud, N.V.

1984 *Excavations at Saqqara North-West of Teti’s Pyramid*, vol.I, Sydney.

Minault-Gout, A., Favry, N. and Licitra, N.

2012 *Une Résidence Royale Égyptienne. Tell Abyad à l’ Époque Ramesside*, Paris.

Mynářová, J.

2006 “Abusir - New Evidence for the New Kingdom. LA 5, Tomb A, Shaft 1 - Blue-Painted Pottery”, in Bárta, M., Coppens, F. and Krejčí, J. (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2005: Proceedings of the Conference Held in Prague (June 27 - July 5, 2005)*, Prague, pp.74–82.

Nataf, K.C.

2014 “Egyptian-Style Pottery Dated to the 13th Century BCE at Hazor, Megiddo and Lachish: Corpus, Ware Fabrics and Typology”, *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 6/3, pp.22–36.

Nordström, H.-Å. and Bourriau, J.

1993 “Ceramic Technology: Clays and Fabrics”, in Arnold, D. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz am Rhein, pp.143–190.

Petrie, W.M.F.

1890 *Kahun, Gurob and Hawara*, London.

Rose, P.

2007 T*he Eighteenth Dynasty Pottery Corpus from Amarna*, London.

Takahashi, K.

2014 “Blue Painted Pottery from Northwest Saqqara,” in Kondo, J. (ed.), *Quest for the Dream of the Pharaohs: Studies in Honour of Sakuji Yoshimura*, Cairo, pp.115–133.

2019 “Blue-Painted Pottery with Intentional Holes and/or Breakages After Firing in North-West Saqqara”, *Bulletin de Liaison de la Céramique Égyptienne* 29, pp.85–99.

Thomas, A.P.
1981 *Gurob: A New Kingdom Town*, 2 vols., Warminster.

高橋寿光
2013 「青色彩文土器の破壊の意味について」、『吉村作治先生古稀記念論集 — 永遠に生きる —』、中央公論美術出版、pp.305–313.
2019a「古代エジプト、新王国時代の青色彩文土器の再利用について」、『古代』第 145 号、早稲田大学考古学会、pp.79–93.
2019b「古代エジプト、新王国時代の青色彩文土器の生産地の増加について」、『オリエント』第 62 巻第 2 号、pp.122–142.

吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川　武、西本真一、柏木裕之
1998 「エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告 —1997 年第 1・2 次調査 —」、『早稲田大学人間科学研究』第 11 巻第 1 号、早稲田大学人間科学部、pp.109–120.

吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川　武、西本真一
1999「エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告 —1998 年第 3 次調査 —」、『早稲田大学人間科学研究』第 12 巻第 1 号、早稲田大学人間科学部、pp.137–149.
2000「エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告 —1998 ～ 1999 年第 4・5 次調査 —」、『早稲田大学人間科学研究』第 13 巻第 1 号、早稲田大学人間科学部、pp.101–111.
2001「エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告 —2000 年第 6 次調査 —」、『早稲田大学人間科学研究』第 14 巻第 1 号、早稲田大学人間科学部、pp.49–60.
2002「エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告 —2001 年第 7 次調査 —」、『早稲田大学人間科学研究』第 15 巻第 1 号、早稲田大学人間科学部、pp.91–106.
2004 「エジプト　ダハシュール北遺跡における早大隊の考古学調査 —1997 年～ 2002 年の発掘調査から —」、『早稲田大学人間科学研究』第 17 巻第 1 号、早稲田大学人間科学部、pp.119–132.

早稲田大学エジプト学研究所（編）
2007 『聖なる丘の発掘：アブ・シール南〔III〕』、株式会社シーズ・プランニング .

エジプト学研究　第 26 号
2020 年 3 月 31 日発行

発行所 / 日本エジプト学会
〒 169-8050 東京都新宿区戸塚町 1-104
早稲田大学エジプト学研究所内
発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.26
Published date: 31 March 2020

Published by The Japan Society of Egyptologist
1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan
© The Japan Society of Egyptologist